

メッセージアウトライン

マタイの福音書7：21～23

「その日には多くの者がわたしに言う」

[21] 「わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのでなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」

7:16~17節では、「ぶどうは茨から採れず、いちじくはあざみから採れない。良い木はみな良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」とイエスは言われた。これは自然の道理として当然のことである。イエスはこのたとえを通して、預言者と偽預言者の見分けかたはその働きの実によって知ることができると教えておられるのである。

さて今日の21節ではイエスは何を教えようとされているのか。ある人は次のように考える。「『主よ、主よ』と口先だけで言うのではなく、行いが大切であるとイエスは強調されているのだ」。しかし、それが正解でないことは22~23節で明らかになる。

まず私たちは「主よ、主よ」と言うべきである。私たちの救い主イエス・キリストに向かって「主よ、主よ」と、お呼びし、告白し、祈ることは信仰者として当然であろう。

使徒パウロはI コリント12:3で「ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも『イエスは、のろわれよ』と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』ということはいけません」と教えている。

「イエスは主です」とは「イエスは神の御子であり、世の救い主です」という意味。

このようにまことの正しい信仰告白は必要であり、イエスは神の御子であり、世の救い主であるという聖書の教えを信じないかぎり、私たちは決して信仰者、クリスチャンとは言えない。それゆえ、クリスチャンは祈りの時においてもまた他の場合においてもいつでも「主よ、主よ」と告白する準備ができている者なのである。

しかし、イエスはそのように言う者全員が必ずしも天の御国へ入るのではないと言われる。

聖書は悪霊どもでさえ、そのように告白することを教えている。→マタイ8:28~29、ルカ4:41、ヤコブ2:19

イエスを単に知識や哲学や学問の対象として理解したり「イエスは神だ、救い主だ、全人類の教師だ」などと言っているとしても、その人物の品性、生き方

がイエスの教えに反しているならばそれは口先だけの信仰と言わなければならない。

親がクリスチャンであった、自分は幼児洗礼を受けている、かつてはどこそこの教会に行っていたなどは救いの保証にはならない。

パウロは I コリント6:9～10で次のように言う。「あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしめる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません」

私たち自身、正しいことを口にしながら、正しくない生き方をしているということはないだろうか。

私たちが主イエスの十字架の贖いの血によって聖められ、御霊によって新しい者とされ、永遠のいのちを与えられているという確信もないままに外側だけのクリスチャン生活を歩み始める時に、非常な危険に自分をさらすことになる。このような生き方をして自分自身を欺いてはならない。良い木にふさわしい良い実を結んでいるかどうか、私たちは自分自身の生き方をよく吟味する必要があるであろう。

[22-23]「その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』」

「その日」とは主イエスがこの地上に再び来られる再臨の日、この世のさばきの日のことである。→ I テサロニケ4：14～5：9、マタイ24：36～39
そしてその日には多くの者が主イエスから「わたしはおまえたちを全く知らない」と宣告されるのである。イエスの名によって預言し、悪霊を追い出し、奇跡を行う。これらは素晴らしいことであるが、それでもさばきの時には「おまえたちを全く知らない」と言われることがあるのである。いったい何が問題なのか。まず、これに関連してマタイ24:24では次のように書かれている。

「偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います」。また II テサロニケ2：9～11でも次のように言われている。「不法の者は、サタンの働きによって到来し、あらゆる力、偽りのしるしと不思議、また、あらゆる悪の欺きをもって、滅びる者たちに臨みます。彼らが滅びるのは、自分を救う真理を愛をもって受け入れなかったからです。それで神は、惑わす力を送られ、彼らは偽

りを信じるようになります」

このように本物と見間違えばかりの偽物がクリスチャンたちを惑わそうとして活動していることが分かる。これは昔も今もあったことであるが、現代においてはますますその傾向が強まっているように思われる。→マタイ24章

この世には、ある程度は預言や悪霊追い出し、奇跡的なわざを行うことができる人間がいるかもしれない。(それが怪しげなものや、トリックである場合もある)→出エジプト7~8章、民数記23~24章、使徒13:6~8、16:16
しかし、その背後には悪魔(サタン)の存在があることを覚えておかなければならない。悪魔は神によって造られた力ある天使であったが、自ら神のようになろうとして墮落し、神にさばかれて悪魔になった超自然的存在で、配下には同様に墮落した一部の天使たちが悪霊となって仕えている。→エゼキエル28:11~16、ルカ11:14~15、黙示録12:7~9

悪魔は主イエスの公生涯の初めに荒野でイエスを誘惑し、罪を犯させ、墮落させようとした。→マタイ4:1~11 悪魔は人を神の国に入らせないためには何でもする。しるしや不思議を行う力も与えるであろう(それには限度があるが)。それゆえ私たちクリスチャンは、しるしや奇跡で人を判断してはならない。

終わりの日に多くの者がイエスの前で自分たちがしたイエスの名による預言、悪霊追い出し、奇跡といった力ある行いを強調するであろう。しかし、イエスは彼らに対して「わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れていけ」と言われる。なんと恐ろしいことであろうか。天国の上席が与えられると思っていた彼らには永遠の暗闇、滅びが宣告されるのである。彼らの何が間違っていたのであろうか。

もう一度21節を見よう。「わたしに向かって、『主よ、主よ』という者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」

「父のみこころ」とは何か。イエスは5章から始まるこの山上の説教の最初の5:2~12節で幸いな人とはどのような人であるかを教えられ、それが神のみこころにかなった生き方であり、天の御国はその人たちのものであり、天においてその報いは大きいと教えられた。

→心の貧しい者、悲しむ者、柔和な者、義に飢え乾く者、あわれみ深い者、心のきよい者、平和をつくる者、義のために迫害されている者。

さらにそれ以降も良き実を結ぶ生き方が教えられている。

自分の敵を愛し、迫害する者のために祈る(5:44)、人に見せるために人前で善行をしない(6:1)、偽善者たちのように祈らない(6:5)、人の過ちを赦す(6:1

4)、宝を天に蓄える(6:20)、

まず神の国と神の義を求める(6:33)、人をさばかない(7:1)、良き実を結ぶために良いもの(聖霊)を祈り求める(7:7~11)、人からしてもらいたいことは何でも同じように人にする(7:12)、いのちに至る狭い門から入り、細い道を歩む(7:13)。

人目を引くしるしや奇跡を行うものであっても、その内面に結ぶ実が上記のような良い実でなければ、やがて主イエス・キリストの前に立ったときには「わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れていけ。」と宣告されてしまうのである。

主イエスはルカ10：1～20で弟子たち七十二人を指名して、ご自分が行く予定の町や場所に、二人ずつ遣わし、そこで病人を癒すことと、神の国が近づいていることを宣べ伝えさせた。そして彼らが喜んで帰って来て報告したことは、「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します」であった。確かにイエスはそのような権威を彼らに授けたのであるが、そこでイエスが言われたことは「しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」であった。それゆえ、私たちクリスチャンは悪霊追い出しや、預言、さまざまな奇跡などの力あるしるしをイエスに良しと認められ、天の御国へ入ることの条件と誤解してはならず、かえってイエス・キリストを自分の罪を贖ってくださった救い主と信じ、自分とイエスとの関係を明確にし、イエスの山上の説教で教えられた良き信仰の実をこの地上の人生において結ぶことこそが必要で大切なことであることを覚えなければならない。「主よ、主よ」と自分の実績を誇る者であってはならない。今日の箇所は、信仰を持つ者としての良き実、行いが重視されているように思えるが、そのような良き実を結ばせる信仰、すなわち自分が神の前に全くの罪人であり、主イエス・キリストの十字架にすがらざるほかないという信仰こそが私たちクリスチャンの原点であるということを忘れてはならない。